

---

# 魔操士は平凡を愛す

NINO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔操士は平凡を愛す

### 【Nコード】

N4128Z

### 【作者名】

NINO

### 【あらすじ】

『地味に地道に平凡に（いつも通り）』

代々伝わる家訓を銘に、今日も「いつも通り」を心がけて、守りの森の魔女の家で平和な毎日を送るユラは、魔女ではなくて、ただのおばちゃん薬師・・・であり続けようとしたのだけど？

どうして赤の他人（王家だけど）のお家騒動に巻き込まれているの??

コツコツ積み重ねてこそ保たれる平和な毎日が崩れるのは、ほんといかに些細な、でも面倒くささ・胡散臭さ全開な出来事が原因なのよ

ね。

せっかくフラグ回避してきたのに〜っ！

しょうがないから出来るだけのことではしましょか。平穏な毎日を取り戻すために！

## 世界観      ネタバレあり（前書き）

『魔操士は平凡を愛す』の世界観です。

話の途中にも出てくる、主人公が存在することとなった世界の状況をご案内いたします。（読まなくても大丈夫なようにはするつもりですが、一応）

話が進めば、時折、更新する予定です。

## 世界観      ネタバレあり

### セーメ神の世界

地球からは結構離れた異世界。

世界は五つの大陸と聖地（島）で形成。

主神：セーメ／黒、光の神：女神ルーチ／金、闇の神：ダウスタラ  
ニス／銀

セーメの御子神      セーメの息吹から生まれた五柱ごはしら

木の神：アーブル／緑

火の神：女神ジャーマ／赤

土の神：女神ティエラ／橙

風の神：ヴェント／紫

水の神：ヒュドール／紺

木火土風水の神々がそれぞれの大陸の守護神であり、そのまま大陸名に。

### 海の守護者

イルメア／青

神ではないが神に準じた力を持つ存在。人々には海竜さまとも海神さまとも呼ばれている。

### セーメの世界の大陸

【原初の聖地】世界で最初にできた島。

世界の中心にある。セーメ神たちがおわす聖なる地と呼ばれている。

【アーブル大陸】大陸位置：聖地の東↘東南

王国：ラウレール、王都：メディオ  
【ジャーマ大陸】大陸位置：聖地の南  
王国：イグニス、王都：ミリユ  
【ティエラ大陸】大陸位置：聖地の西南、西 主人公がいる地  
王国：トウルバ、王都：サントル（仏）  
【ヴェント大陸】大陸位置：聖地の西北  
王国：ベンダバル、王都：ワサト  
【ヒュドール大陸】大陸位置：聖地の北、東北  
王国：ヴァーテル、王都：ケントロン

南

ジャーマ

東 アーブル — 聖地 — ティエラ 西

ヒュドール — ヴェント

北

主人公のいる地のこと。

ティエラ大陸は、王都を中心に8つの領（北、北東、東、東南、南、西南、西、西北）に分かれる。

主人公の住む『守りの森』があるナムソは、西南領。聖地から一番離れている場所。

北領：ノルテ

セーヴィル公爵家（退位後の方々）が治める地

北東領：ノルデステ

トウルバ王家が治める地、位置的には王都に一番近い場所、学問都市

東領：エステ

ヴァストーク公爵家（王族の親戚）が治める地、外交都市（港）

東南領：ザウドーステン

スッデスト侯爵家が治める地、東領と南領に挟まれている為、人

の行き来が盛ん。商業都市

南領：スール

ノトス公爵家が治める地。神殿がある場所。

歴代の大神官は8割以上、ノトス家から輩出。大地の神ティエラが守護する聖域とされている

西南領：ナムソ

スーロエステ伯爵家が治める地、肥沃な大地を有するため国内の食糧の7割が生産

西領：オエステ

ヴェステン侯爵家が治める地、西南領に次いで農地

西北領：ノロエステ

ブクソ伯爵家が治める地、良質な鉱石が採れる

四大貴族：セーヴィル公爵家、ヴァストーク公爵家、ノトス公爵家、ヴェステン侯爵家

## プロローグ

それは12年も昔。

わたしにとってはごくごく普通の日常だった。

朝起きて、顔を洗ったらスキンケア。

朝食はクロックムツシュにサラダ、フルーツにヨーグルト、しっかり食べて、食後はコーヒーを飲みながら経済新聞に目を通す。

時計を確認して、食器はキッチンの食洗機にセット。ベランダに出て鉢植えに水やり。

パウダールームに向かって歯磨きしたら、フルメイク。今時あえて黒いロングヘアーはしっかりブラッシング、三十路近くてもキューティクルは失わないのは毎日の努力の賜物よ。

寝室に戻ってクローゼットから取り出すのは、戦闘服と豪語するシルバーグレイのスーツに清楚かつエレガントなフリルブラウス（もちろんシフォンよ！）。

着替えて姿見で全身チェック。ストッキングにも伝染無し。

今日も完璧、キャリアビューティースタイル。

いつ急な会議が入ろうとも、どんな難しい商談が始まるうとも、突然の取材のアポが入っても。

ええ、ええ、しっかりこなしますとも！

自分の城を買ったからにはがつつり稼ぎますとも！

最後にバッグの中身をチェック、忘れ物が無いのを確認したら、これも戦闘服の一部、7センチヒールを履いて、玄関を出る。

おひとりさまのお城を出ながら一言。

「さあ、今日もしっかり働いて稼ぎますよー」

頭のどこかでは、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、お母さんが困った顔しているのとあわせて、子供の頃から聞き慣れた言葉がテロップのように流れているけれど、それにはごめんなさいをして、玄関の扉に鍵をかける。

ガチャリ、その音と一緒に気持ちを切り替えて。

わたしは今日も、ガッツリ派手に稼ぎます！

・・・なーんて、ほんと毎日毎朝、自分を鼓舞してわたしなりに頑張ってたんだけどねえ・・・。

それが何でかまあ、いろいろありまして。

ええ、ほんといろいろありまして。

ちょっとマジでシャレになんないでしょ、なんなの一体この状況

！？ みたいなの？

異世界ってなあに？ なんのお約束？ 何フラグ？ っていうか三十路近いのにアイタタタ！？

って状況になりました。ええ、はい。

まあ、それに至った経緯だとかシャレになんない状況はおいおいの話として。

ほんっとーに愕然としたのよ。

聞くこと、見るもの、すべてに培ってきた一般常識とともに自分のアイデンティティを破壊されていくような気すらしたわね。うん、で、そうして自分が置かれた状況（まあ、シンプルに異世界突入しちゃいました！ だけどさ、ふん！）を理解するに比例して、バカみたいに泣いたし喚きそうになったしゴネたし怒ったりもしたのよね。

それでもまあ、最終的には今すぐ元の世界に帰りたかっていう、自分の当然の希望が叶うことは無理だとなんとか納得しまして。それを腹立たしくも思ったけど、わたしも三十路に近い大人ですから。

今思えば結構無理しちゃってたんだなあ、と思うけど、デキル大人の女を何年もやっていただけだし。

まあ、そんなこんなで譲歩して、救済策が必ず出ることが前提の現状維持を条件として、そのイロイロな状況を受け止めることにな

っただけだね。

でもって始めてみれば、その状況（言いたくないけど異世界生活よ！）が案外自分には向いていると気付いたりもしたわけよ。

そこで、今さらながら「お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、お母さん、ごめんなさい。でもって家訓を口酸っぱくして言い続けてくれてありがとう」なんて感謝して、毎日平穩に過ごしてたんだけどねえ・・。

でもって、ながーいながーい現状維持の為に、毎朝呪文のように家訓を口にして努力も惜しまなかった（つもり）んだけどねえ・・。

それがどうしてこうなったのやら。

目の前を流れるのどかな田園風景をなんとなくに見ながら、この世界にきてほんと久々に。

随分「吐かなくなった」溜息をわたしってば漏らしちゃったりしてるわけよ。

「セーメ様、どうなっちゃってんのよ」

というぼやきと共に・・。



## いつも通りの日常と過去と #01

朝、目覚めてするのは大きな伸び。

ベッドを降りて、カーテンをそつとめくり、外の天気を確認する。窓ガラスに映った自分の顔を見るのは一瞬。

慣れ親しんだ呪文を小さく唱えた後は、顔を洗って身支度をして。

寝室を出る前に姿見に映った自分が「いつも通り平凡」であることを確認して口の端を上げる。

そして、いつも通りに籠を手に、小さな家の台所の裏戸から庭に出る。

まずは雲ひとつない朝の澄んだ空を見上げて深呼吸。

まだ薄暗い朝の空気は、初夏とは言え若干の冷たさを感じる。

大きく吸った息を吐き出しながら、口の中で小さく呟くのは彼女だけの大事な言葉。

それは魔法の呪文でも何でもない、ただの言葉。

きっと他人が聞いても首を傾げて、ただど大した意味を捉えることもなくスルーして終わるような、ただの単語の羅列。

いつも通りの同じ言葉。

「地味に地道であれ。いつも通りの平凡であれ。さすれば幸せは逃

げないもの」

そう言つて、目の前の庭に視線を落とす。

今日もまた、いつも通りの平凡な朝を迎えられたようだ。

ただそれだけのことにユラは満足げに口の端を上げた。

「セーメ様たちにも感謝しないとね」

そう付け加えて。

大いなる存在セーメ、光の女神ルーチ、闇の神ダウスタラニス。

世界は何もない混沌の『魔素』だけの大海原だけだった。

そこに原初の島と言われる大地とともに出現したのはセーメ。

その中心でセーメが右の腕かいなを振り上げると現れたのが光の女神ル

ーチ、左の腕かいなを振り上げると現れたのが闇の神ダウスタラニス。

セーメの両脇に現れた兄妹神の二柱は、セーメが何を言うでもなく、世界を形あるものにするために、それぞれ天に昇り光と闇の間、つまりは時ときを創った。

それが確かなものになると、セーメは今度は幾度かの息吹でこの世界にたくさんの物を生みだした。

一息目からは、ありとあらゆる『植物の種』が生まれ、原初の島は緑溢れる大自然の島となった。

二息目からは、ありとあらゆる『生物の種』が生まれ、原初の島に命を持つ動物と人が現れた。

セーメは、そんな限りある命しか持たない生物たちに、それぞれに見合った力と知恵、そして「言葉」を授けた。

セーメの恩恵を授かった生き物たちは、限りある命を未来へ繋げるためにそれぞれが番つかいとなり、あつという間に次の命を増やし続けた。それは人と人、動物と動物だけではなく、人と動物が交り合っ  
て生まれた生き物も在り、気付けば、原初の島は溢れかえるほどの多種多様な生き物ばかりとなってしまった。

そうなると自分の生きる場所を守るため、自分という命の種を存続させるため、力と知恵と言葉を持った生き物たちは衝突するようになった。

ただの小さな言い合いのような衝突であれば、それは言葉を持つ生き物同士、解決も出来たが、時を経るとともに能力の違う生き物の間ではだんだんと力の優劣が生まれ、話し合いや協力といった解決方法が後回しにされるようになってしまった。

動物の圧倒的な破壊力、人の狡猾さと結束力と適応力、人と動物の間に生まれた者のみが操る魔素の力……これは後に魔法と呼ばれるようになる……、それぞれが特有の力をもって互いの命を削り合うようになってしまった。

それを見て嘆き悲しんだセーメは、兄妹神のダウスタラニスとル  
ーチと相談し、己の息吹から生まれた限りある小さな命たちの行く  
末を守るために、三度目の息吹を世界に与えることにした。

原初の島を世界の中心から等間隔に離れた場所に向かつてセーメ  
は大きな息吹をぐるりと回りながら均等に吐き出した。

何もなかった大海原に新たに出現したのは、五つの大地と、その  
核となる守護神たち。

それがセーメの御子神五柱。みこがみつはしむ

木の神アープル、火の女神ジャーマ、土の女神ティエラ、風の神  
ヴェント、水の神ヒュドールである。

またこの時、魔素ばかりの大海原が大きな変化を遂げ、海を守る  
者イルメアが、限りある命の糧となる生物 - - 魚や貝、海藻の類  
とされる - - と共に現れた。

生まれたばかりの御子神たちと海を守る者イルメアは、己の神力  
でもってそれぞれの大地と海を守り、原初の島から渡ってきたそれ  
ぞれの限りある命を統べることをセーメたちに誓った。

セーメは御子神たちに限りある命を預けることを決め、そして強  
大過ぎる力 - - 知恵と言葉と魔素を操る力 - - を、限りある命  
からそれぞれ取り上げた。

力を取り上げられたことにより、己たちの無力さを思い知った限  
りある命たちは、セーメの怒りと悲しみを知り、それまでの自らの  
愚行を心から悔恨し、それぞれ新たに在ることを許された地で、改  
めて神々を畏れ敬いながら暮らすようになった。

それがこの世界と信仰のはじまりである。

セーメは世界の創造神、光の女神ルーチ、闇の神ダウスタラニス  
は時を司る兄妹神二柱、大陸の守護神として限りある命に恩恵を与  
える役目を司ることになった御子神五柱 - - - 木の神アーブル、火  
の女神ジャーマ、土の女神ティエラ、風の神ヴェント、水の神ヒュ  
ドール - - - 。

限りある命の糧となる海の恵みを育み、旅人の航路を守る役目を  
司る海の守護者イルメア。

世界はセーメと光と闇の神を祀る聖地と、御子神五柱が守護する  
五つの大陸と海の守護者が治める大海原で成り立っている。

これは、ユラが知る世界とは違う世界の成り立ちの話。

12年も前にこの世界に落ちてしまったユラが、魔女に聞かされ  
たこの世界の常識である。

## いつも通りの日常と過去と #01 (後書き)

かなり久々の書き物にて、少々見切り発車な感も否めません。

自分の趣味ががつり表されているだけなので、楽しくない方には  
ごめんなさいorz。

しばらくはのんびりペースですがご容赦くださいませ。

## いつも通りの日常と過去と #02

バジルにミント、タイムにローズマリー、アンゼリカ、オレガノ、クレソン、ルバーブ、ラディッシュ・・・。

小さいながらも自慢の庭を色とりどりの花や緑が茂っているのを見るだけで幸せな気持ちになっていく。

数十種類のそれらが生い茂る庭は、今となつては想像も出来ないほど何もなかった・・・12年前のここは茶色い土くれと小石だらけで雑草がところどころ顔を出していただけ・・・時から、ユラが時間と労力をかけて整えてきたものだ。

街で購入した種や、森で分けてもらった小さな苗を一つひとつ植えて育て、増やし・・・そうやって丹精込めて育ててきたものだ。

育てたそれらは、ユラの食卓を彩るほか、消臭剤や香草茶といった日用品、薬の材料と、薬師となった彼女が得る大事な収入源でもある。

採れ頃のハーブの軟らかな葉をせっせと摘んでは左腕に抱えた籠に入れ、時折土の状態を確かめ、「美味しく育ってちょうだいよ」とハーブたちに声をかけては視界に入った雑草を抜く。そんな作業を繰り返し、庭のあちこちを移動する。

籠がある程度ハーブと花、小さな野菜でいっぱいになれば、それを大事そうに抱えて家の中に戻り、台所にある大きなテーブルに置

いてまた庭に戻り、今度は水をまく。

大量の水を必要とするハーブや野菜が植えられた土には特に念入りに。

どうしても栄養が足りなさそうな土には腐葉土やお手製の植物栄養剤を使うが、朝の収穫に精を出しながら確認した土の様子は悪くない。土の女神ティエラの加護サマサマだ。

そもそもハーブは強い植物でもある。おまけに常日頃から世話をしているだけあってユラの庭は、森の奥に負けないほど肥えた土地だ。あとは陽の光がしっかりとサポートしてくれる。

しっかりと水分を得た緑たちを満足げに見やって、ユラは太陽が昇り始めた空を眩しそうに見上げた。

「お日様ありがとう、セーメ様もルーチ様もダウスタラニス様もティエラ様もありがとう、今日もよろしくね〜」

自然の力とこの世界の神々が与えてくれる加護にいつも通りの言葉で感謝しながら庭を後にし、裏戸から台所へ戻れば、今度は収穫した物の仕分けと朝食の準備だ。

ハーブと花と野菜は、料理に使う物だけを残して乾燥させる物と薬作りに使う物とに分けてそれぞれ木箱にしまう。

それらから少しだけ分けておいた黄色い花を咲かせたタンジーは細い花瓶に活ける。

赤茶けた花瓶は素朴な物で、お世辞にも見目が良いとは言えない作りだが、ユラの家に野菜を持ってきてくれる村の子供が学校の授業で作ってくれた物だ。

それをテーブルに飾れば、今度は朝食作りに精を出す。

竈に火を付け、昨日の夜に作っておいた野菜たっぷりスープが入った鍋をコンロに置き、大甕から汲んだ水を張った陶器のポウルにハーブをつけておく。野菜を切りながら考えるのは、オムレツの具材だ。少し前に街で購入したベーコンの残りにしようか、それともブレーンにしようか……。

そうこうしていると、玄関からカランコロンとやわらかなベルの音が鳴り響いた。

「あら、もうそんな時間なのね」

まな板から顔を上げると同時に聞こえたのは、いつも通りの元気な声。

「おばちゃん、おはよー！」

振り返れば、これまでと同じ。

昨日と同じく、元気いっぱいといった少年が玄関から飛び込んでくる。「いつも通り」な日常。

朝の光とともに訪れた子供を見て、ユラは目を細めながら「いつも通り」に心から感謝した。

それは12年前に遡る。

ユラは、地球という星の日本という国で、仕事に励むごくごく一般的な会社員として毎日を過ごしていた。ごくごく一般的と言うには、彼女の生活も彼女自身も少々派手ではあったが・・・とにかく、彼女自身は、自分の生活に何の不自由も不満もない生活を送っていると信じていたのである。

それがある日の休日、実家の神社の蔵掃除を手伝わされることになり、そこで見つけたのがボロボロの古いお札である。

みやぐ宮司でもある祖父に報告するも、祖父は見たこともないと言い、ごんぐんじ権宮司でもある祖母もごんねき権禰宜である両親も知らないと言う。

本当かどうかは知らないが、神力があると噂の祖母が「触つても何も無いから焼いてしまつて構わない」と呆気なく言うものだから、蔵から出した他のごみと一緒に燃やした・・・念のため被つてはもらつた・・・ら、何故か奇妙な色の煙が発生し、ユラが「あれ？」と思うよりも先にそれらが爆発したのだ。

いや、爆散と言つた方が正しかったのか。

ともかく爆風で蔵の壁に叩きつけられたユラを見て、悲鳴を挙げた母が呼んだ救急車で病院に運ばれたところまでは記憶は定かである。

医師や看護師に受け答えしたこともぼんやりだが覚えており、病院のベッドに寝かされ点滴を打たれたそこまでの記憶もすっかりし

ている。

救急車に同乗した母も、実家から駆けつけてきた祖父母に父親も  
- - -みんな神職装束のままだったのはある意味笑えた - - -ベツ  
ドの傍にいて、みんなが「無事でよかった」「軽傷で済んでよかつた」と泣いて喜んでいたから、ああ爆散は凄かったけど、やつぱり大した怪我でないのだろう、さすがに注射何本も打たれて眠いや、目覚めたら打撲痛が嫌だなあ、自分の担当の仕事の締め切り大丈夫だっけ? . . .くらいにしか思っていなかった。

ところが、次に目を覚ましたら、そこは病院ではなかったのである。

何も無い真っ白なのか真っ黒なのかも判断がつかない不思議な空間に、きらきら光っている(ように思えた)人たちに囲まれていたのだ。それがファンタジーそのものな格好をした綺麗(と思われる)な女性とも男性ともとれる顔立ちの人たちなのだ。

なんだなんだ夢か? いつの間にこんなファンタジーな夢を見るようになったんだわたし、最近この手の映画観たっけ? って言うか夢の中で混乱するなんてヤバいでしょ自分、と自分で自分にツッコミを入れるも言葉が出ない。

そうこうしていると、その中の一人が「申し訳ございません」と土下座したのである。土下座!

ジャパニーズ正式謝罪最大級のポーズだ。

「へ？」と間拔けた声が、自分の夢（だと思っていた）の世界での第一声でもそれは仕方なからう。

「おばちゃん、おはよー！」

玄関の木戸を開けて入ってきたのは、背負子しよこを背負った小柄な少年。

ベージュ色のシャツに茶色のベスト、同色のズボン、肩から斜めにかけているのは厚手の布地で作られたカバン。

ユラの住む『守りの森』の魔女の家に一番近い村の農家の子供、ジャンだ。

週に一度、国休日である日曜が明けた月曜の朝、ジャンは週に一度発行される週報紙と一緒に自宅の畑で採れた野菜をまとめてユラの家に向けてくれるのだ。

「おはよう」と声を返すと、ジャンは慣れた所作で背負子を下ろし、玄関そばの木のベンチの上に置く。背負子の中から見えるのはジャンの家の畑で採れたのであろう新鮮な野菜たちだ。斜めかけのカバンもその傍に置き、その中からがさごそと古週報紙を出して広げる姿もいつも通り。

「今日はさ、イーモやネギ玉のほかにも、水気が多いダイコンとキャベツが採れたからさ、これだけ先に片しとくね」

そう言ってジャンは慣れた手つきで古週報紙に水気の多い野菜を

包み、それらを抱えて庭に続く裏戸とは逆側にある貯蔵室の扉を開けて入っていく。

（イーモ、ネギ玉、ダイコーンにキャベーツ・・・相変わらず聞き慣れないわねえ）

自分が知っている名称と少しずつズレた音を耳にする度に、やっぱりここは自分が知る世界とは違う場所なのだと再認識してしまう。

12年も経つのだからいい加減慣れてもよさそうなのに、三つ子の魂百までとはこういうことを言うのだろうか？ と苦笑しつつ、貯蔵室に入っていく子供の背中に礼を言えば、どこで覚えてきたのか気にするなとばかり両肩を器用に上げてみせる。

いつもならば「いいっていいって」と言葉が返ってくるというのに、今日のそれはちょっとした変化だ。

そこで、ははあ、と思いつく。

ジャンが見せた仕草は村の青年たちによく見られるものの一つだ。

そう言えば、この子は11歳だったか。この国では大人の仲間入りは15歳からだ。

この国の一年はユラが知っているそれよりも長いが、それでもあと数年もすれば大人の仲間入りをする少年には、たくましい体を持つ年上の青年たちの腕や肩を使ったボディランゲージはカッコいい大人の男の仕草として見えるのだろう。

既に大人と言われる自分にすれば「いつも通り」が一番だが、成長していく子供は「いつも通り」のままではいけないのは確かだ。

この少年も日々、少しずつ変化しながらいつか彼なりの「いつも通

り」のスタイルを作っていくのだろう。

暗い貯蔵室で作業している少年の背中が眩しく見えて、かつては自分もそうだったのだろうか？ いやそうだったのよねえ、などと考える。

やっきになって大人になろうとしていたのはどれくらい前のことだっただろう？

もう随分昔のことのようにも思えるが、記憶を辿れば、そう遠い時代のこともない。

そんなことを考えていたらぼんやりしていたのか、いつの間にかジャンが目の前にいて「おばちゃん、どうしたの？」と子供らしい不思議そうな顔でわたしを見上げていた。

「ああ、ごめんね。ちょっとぼんやりしちゃって」

さすがに元の世界のことを考えてたのよーなんて言えるわけがない。

適当に鍋の中身をかき混ぜながらそう言うと、ジャンは笑って「おばちゃん、農家でもないのに早起きだし、働き過ぎなんだよ」と、また両肩をすくめるようにして軽口をたたく。

（なんだか、急にマセた女の子な行動ねえ）

ジャンと会うのは一週間ぶりなだけに、これまで見られなかった大人ぶった仕草は、ユラからすればまだまだ子供なジャンがするにはどうにもかわいらしく見えて、つい笑ってしまいそうになる。

とは言え、不用意に笑えば意外と勘のいい少年が拗ねるであろう

ことも容易に予想できた。

そこで手元を見るように集中したふりをして「干した薬草を刻むのに昨日の夜は夜更かししちゃったからねえ」と言ってみたのだが「それじゃあ、しょうがねえなあ」とジャンはすんなり納得してくれた模様だが、そう答える時ですら、これまたこれまでには見られなかった腕組みをしてうんうんと頷く姿を見せるものだから、もうおかしくてしょうがない。

引き結んだ唇の端がピクピクし始めてどうしようと思ったが、それよりも先にジャンが「あ、週報紙も出しておくね」と傍を離れてくれたので助かった。

さて、さつさと朝食を完成させないとね。

「へ？」

「申し訳ございませんでしたー！！」

ユラの間抜けた第一声が続いて聞こえたのは、フアンタジーな方々にはどうしても似つかわしくない文言と謝罪ポーズだ。

それに呆気にとられている内に、涙ながらに（涙は見えなかったけどそんなような雰囲気を出してたのよ）語られたのが、ユラの現在の状況なのだ。

聞けば、ユラが燃やして爆散の被害にあつた原因は、やはり言おうか蔵で見つけたあの怪しいボロボロの古いお札だった。

それは『界渡りの札』という、異世界同士の間を渡る手段だと言う。

なんでそんなけつたいな物が実家に！？　と思うユラが口にするまでもなく、ファンタジーな方々はペラペラと先回りして回答してくれる。

どうもユラの祖先に界渡りに関するプロフェッショナルというか、目の前のファンタジーな方々の界渡りに関するお仕事を手伝う能力者がいただとか。お札はその時の物らしい。

まあ、確かに我が家は由緒の古い神社だけどさ。お祖母ちゃんも神力を持つ巫女とかで昔は有名だったらしいし・・・今回の事象からどうも信じられないけどね。何せお札を手にして「何もないから焼け」って言ったのは祖母だ。

一瞬遠い目をしてしていると、話を続けても構いませんか？　と妙に氣遣われた。

（自分の夢なのにファンタジーな存在に氣遣われるってどうなの？  
わたし）

溜息を吐きつつそう思ったわたしに一瞬何かを言いたげそうな方々だったが、で？　と話の続きを促すと、界渡りは遙か古代より起こる現象らしく、大昔は不思議なものではなかったと言う。

なるほど、いわゆる神隠しとか魔のトライアングルとか、そういうものだろう。

ちなみに。

その『界渡り』という現象が起こる？ いやシステムを作った？  
のは、ユラの目の前にいるファンタジーな方々よりもっと上の、  
つまりはるか昔からいる大神様と呼ばれる存在の思し召しだとかで、  
この現象が起こるようになった大元の理由はうやむやだとか、限り  
ある命には伝えられないのかなんとか・・・（なんていい加減な！）  
。

まあともかく、界渡りというのはそう珍しいものでもなんでもな  
いらしいのだが、神様が定めた？ システム？ とは言え、界渡り  
そのものがとんでもない現象であることは確かで、それによって空  
間の歪みだとか諸々当然いろんな問題は生じるらしい。

そういった歪みを是正するのは、目の前のファンタジーな方々の  
中の一人（一柱？）で、実は目の前にいる皆さん、それぞれ違うお  
仕事を担当されているそうで、本来、こんなに集まることはないら  
しい・・・（それを聞いてどう反応するか？ はあ、そうですか大  
変ですねとしか言えんだらう、この場合）。

ただどこから聞いた話はかなりおっそろしかった。

界渡りということとは、違う世界から違う世界に行くということだ。  
生きる世界が違えば言語も常識も生体組織も違う場合もある上に、  
魂が相容れない場合もあるので（その場合肉体も魂も消滅するそう  
な、なんて恐ろしい！）、界を渡る場合、基本的にはその生き物の  
記憶に残らないようにするのだが、必ず、今、ユラがいるような狭  
間の空間で、目の前のファンタジーな方々が個々の適応力をチェッ  
クするらしい。

それは、選ばれて界渡りをする者の場合も、何かの偶然で界を渡  
ったり召喚されてしまう者の場合も言わずもがな。

え！？ 偶然とか異世界人の身勝手に呼ばれる場合も・・・って、それって無責任じゃないの！？ と詰問しそうになれば、また回答が先回りですべてくる（くそう、頭の中読まれてるよ、夢なのにムカつく！）。

どうも目の前のファンタジーな方々は、原因に関係なくとにかく異世界にいつても大丈夫かどうかチェックするのがお仕事で、それ以外には干渉が出来ないらしい。

（なんだそのお役所仕事。まあさつきみんな担当の仕事違っつて言っただけだね）

ただし、恐ろしい目に遭うも、良い目に遭うも、元の世界に戻るにも、その行き先の異世界を管理する大いなる存在（ええい、面倒だ。担当神でいいよ）の采配らしく、そこは要相談らしい。

つまりは行き先の異世界の担当神のレベル（腕前か？）次第で、界を渡った生き物の今後は左右されるのだ。マジこわいっての・・・。

とは言え、大体において界を渡る生き物（ほとんどが人間と呼ばれる存在だ）には、魂レベルでそこに行く原因や理由があり、それは大きな声では言えないがギフトでもあり贖罪でもあるのだという。

まあそんなこんなで、この話をつきつめてするともっと多大な時間を要するので割愛するが、と前置いて・・・（なんだそのおや（以下略））、

ファンタジーな方々は、もう一度繰り返し返した。

「申し訳ございませんでしたあーっ!」と。

だから早く、謝罪の理由言えっの。

いつも通りの日常と過去と #04 (前書き)

今回はちょっと長かったり。

日曜の内に焼いておいた山型パンは分厚く切って竈の下のオーブ  
ンに。

コンロにかけてフライパンには油を引かずに細かく刻んだベー  
ンを。

「わああ、いい匂いがする」

「今日はスープにサラダにオムレツね。中身はベーコンよ」

「やった！ おばちゃんのおムレツ朝から食べれるなんてツイてる  
な。俺、食器並べるね！」

「ええ、ありがとう。じゃあ、よく働いてくれるジャンには、今日  
はパンにチーズものせてあげましょうね。すぐ作っちゃうから待つ  
ててね」

「おおお、よっし！」

振り向くと、どうやら週報紙を出すだけでなく、テーブルの上を  
拭いてくれていたのか、ジャンがふき手を掴んだまま拳を握って喜  
んでいた。

体全部で喜びを表す少年を微笑ましく見ながら思うことは「やつ  
ぱり誰かと一緒に嬉しいものね」という温かな気持ち。調理する  
手が軽くなったような気すらする。

ベーコンがしんなりしたら、少量のバター、割りほぐした卵と  
ほんのちよっとのミルクを混ぜたものを流しいれ素早くかき混ぜる。  
ある程度卵が固まってきたらフライパンを揺すって丸めていく。

融けたバターと卵とベーコンの良い匂いが漂い始めた頃、ユラの背後で食器を並べるジャンから鼻歌が聞こえてきた。楽しそうだが少々調子つ外れなのは、ご愛敬。あれは畑仕事をしながら歌う父親似なのだろう。

コンロから外したフライパンに木蓋をして中身を蒸らす。ついでにオーブンの中のパンを見れば頃合いの焼き加減だ。こちらも火を止めて、パンの上にチーズを乗せる。少し経てば、オーブンの余熱でいい具合に溶けるはずだ。

その間にサラダを仕上げ、スープをよそう。気付けばユラのそばに皿を両手で持ったジャンがいた。

もう待ちきれないと言った様子の子供を見て、ついつい笑う。

そしてふと思った。

もし子供がいればこんな感じなのだろうか、と。

さすがにそれは今となつては到底叶わぬ望みだと分かつていながらも想像してしまった。もし、あの時結婚していたら、ちょうどジャンくらいの子供がいたのだろうなあ、と。とは言え、この世界の今の状況だからそれもいいなあと思うのであって、元の世界の前の状況だったら到底子供がいる生活など想像もしなかつただろう。

（人間ってやつぱり欲深いのよねえ、これはこれで平凡で幸せな形だつて解ってるのにね）

いつもなら何とも思わない楽しいだけの朝が、今日に限ってどうもいろいろ考えてしまう。

もしかしてジャンの成長の兆しを感じて、ほんの少し影響されて

いるのだろうか？ 子供の成長が早いなんて当然で、ジャンだつていつまでも子供のままなわけがない。

実際、11年前にジャンが生まれた時には、ユラはもう魔女ヴィオレの弟子としてその出産にも立ち会っているのに、だ。それから今日までを知っているというのに・・・自分のメンタルの脆さに少々呆れさえしてきた。

「いつも通り」を願っているが、それは時間が停まって欲しいという意味ではない。

地道に地道に働いて、大きな欲を持つこともなく平穩無事に過ごせる毎日のことを「いつも通り」というだけで、成長の変化は良いことなのだから無理に止めてはいけない、と。

師であるヴィオレにも、育ててくれた家族にも口を酸っぱくして言われていたのに、気付けば変化の無い時間が停まった状態を「いつも通り」と勘違いする。

（気をつけていたはずなのに・・・まだまだねえ、わたしも）

今日も「いつも通り」なんて言いながら、その意味を捉え損ないそうになっただけならしい自分に苦笑うが、落ち込む間もなく、隣からお皿を持ったままのジャンが「おばちゃん、早く！」とせつついてくる。

（そうね、まずはこの子もわたしも胃袋を満たさなきゃ）

ジャンの成長は間違いなく『良い変化』だ。

わたしも見習わないと・・・そう思うことにして、子供の一番の目的であるフライパンの木蓋を取り外した。

「………は？」

謝罪のあとに続いた、現状の説明について出た言葉は、やっぱり  
間拔けた一声だった……。

「えーっと、夢、じゃない？」

「……はい、夢ではございません。最初に申し上げました通り、  
ここは狭間の空間。界を渡るすべてが一度通る場所であり、貴女様  
も現在、病院のベッドの上ではなく、この狭間の空間に魂もろもろ  
おいでになっている状態です」

「はい？」

何もない真っ白なのか真っ黒なのかも判断がつかない不思議な空  
間……それが今、現実にはユラが在る場所だと言う。

目の前のファンタジーな方々も、現実に在る存在だと言う。

だからこそ、ユラの頭の中で考えていることが読めるわけではな  
く伝わってくるのだとも。（当然、読むな！と、凄みがあると評  
判の笑顔付きで脅し……いやお願いしたので以降、ちゃんとした  
会話である）

そして、そのファンタジーな方々曰く。

ここ狭間の空間では、適応力をチエックする担当者Aをはじめ、界渡りとなった原因や状況を調査する担当者B、界渡りを起こす媒介の研究担当者C、適応力をチエックした後、に所定の異世界に送る担当者D・・・などなど、様々な担当者があるらしい。

ちなみに任期は地球の暦換算で400年だ。(もうほんとに『界渡り管理局』でいいだろうとユラが呆れて勝手に名付けたのは言うまでもない)

では何故。今回、ユラがココにいるのか？

その理由の一つは、ユラの実家の蔵にあつた札ふたで間違いない。

爆散してしまった札(空間情報から復元したらしい)を調べたところ、あの札は今の界渡り媒介研究担当者(Cだ)の3代前、およそ1200年前の時代に作られた物で、今とはスペックも使用方法もまったく違うらしい。だが、本来なら燃やしたくらいでは爆散はおろか、界渡りそのもの、もしくは類似した現象は起こるはずがなかったのだと言う。

つまり燃やして爆散・・・ということから既に異常なのだ。

とにかくこの現象を放置することは許されず、また、界渡りに関する物は古い札だろうが宝玉だろうが何だろうが、とにかく調べるのがお役所もとい界渡り管理局の仕事。

そこで担当者Bがユラの実家の蔵周辺を調査し、担当者Cが爆散した札を調査していた最中さなか、何らかの手違いで調査方法にミスがあり、本来ならば寝て起きれば退院! のはずの爆睡中のユラが狭間

の空間に引つ張られてしまい、その上、担当者ABCその他諸々の担当者たちが驚く間もなくユラが地球とよく似た異世界に飛んでいってしまった、と。

ユラが仮に界を渡る該当者であったとしても、狭間の空間から勝手に異世界に飛んでいくことはあり得ないことらしい。と言うよりも不可能に近いことらしい（ああ、もう、らしいばつかでイライラする）。

まあ、それでもまだラッキーだったのは飛んで行った先が地球とよく似た異世界だったため身体に影響はそうなかったこと、そして界渡り管理局から何も通知がなかったに関わらず、その異世界の担当神が優秀で、その異世界に歪みを生じさせることなくすぐさま狭間の空間に爆睡中のユラを戻してくれたことだった、らしい。

その現象が起こっている間、病院の点滴に入った薬で昏睡していたユラがすべてを認識していなかったのはラッキーだったのかどうかは疑問だが。

何はともあれ、この現象はすべてがとんでもない異常現象でもあり、特に異世界に飛んだユラを止められなかったことは完全に界渡り管理局に所属する面々のミスである。

当然、局内？ には激震が走った。早々に対応策を練り、マニユアルのアップデートを図らねば！ といったところであろう。

だが、そもそも彼らは、はるか古代からの大いなる存在より狭間の空間の管理を任されている優秀であり善良な御使いである。彼らは、その持ち前の良心？ から、まず何よりも第一に優先すべくはユラは元の世界に<sup>地球</sup>戻してユラの生活を元通りにすることである！ と決意・結束したわけだが……。

不幸なことに、その返還方法に選択した手段がまたもまずかったらしい。

最近（とは言っても50年前らしい）界送りを受け持つこととなった担当D（目の前で土下座し続けてるヤツらの一人だ）が、ユラは界渡り札でやってきてしまったから帰りも札でいいだろうと、安易に“最新式”の札を使ったらしい。

説明をそこまで聞いたわたしが「おいちょっと待てや」と言葉悪くつつこんだのは言うまでもない。

（担当C曰く、爆散した札は随分古い昔の型です、ってさっき言ってなかったかしらあ？）

そうなのだ。

ユラの前で爆散した界渡りの媒介札は3代前の担当者の時代の物・  
・つまり1200年前の物だ。最新型と古い型じゃあスペックも取扱方法も違うのは当たり前なのに、担当Dは最新式を使ってしまった。しかも、その前にユラは原因不明の異世界突入を一度成してしまっているのに、だ。

つまり原因不明だらけの事象（地球から狭間の空間にやってきたこと、狭間の空間から異世界に飛んだこと）の原因を究明することもすつ飛ばしてしまつた上、一度突入した異世界から狭間の空間に戻ってきたユラは今度は元の世界（地球）との適応力を調べなくてはならなかったはずだ。

それなのに、それをスルーしてしまったのだ。このおバカさんどもは。

そしてまた、狭間の空間からすつ飛んで行ったユラを急いで戻し

ただと言つ。

以上、お馬鹿さんたちの証言・説明から精査・整理した今回の  
事象詳細である（by ユラ）

「……………なるほどねえ」  
「……………」

気がつけば見えない椅子に座り、両腕を組み、右手で細い顎のラ  
インをなぞりながら首を傾げるユラは、会社での姿そのものだ。ミ  
スを報告する部下の前での……………。  
病院服でなければ、の話だが。

ユラの言葉の後、奇妙な沈黙だけが場を支配する。

律儀と言つか、ファンタジーな方々は現在も正座中である。

ユラが何かを言えばすぐさまジャパニーズ最大級謝罪ポーズを取  
りそつである。

そんな彼らを見て、当然出てくるのは溜息だ。

恐らく彼らは本当に御使いと呼ばれる存在であり、また、それ故  
に人間世界で言うところの善良さ、良心を持っているのだろう。

とは言え、ここまでの説明もかなりたどたどしく（ミスの発覚を  
恐れたのではなく、界渡り管理局担当者としての責任感と御使いで  
あるが故の良心が、ユラにかかった負荷や迷惑を本当に申し訳ない  
と思っっているからであろうとは薄々感じている）、あまりの愚図々

々さ加減に、キレそうになったユラが発散する怒りでもって細部までの説明を促したのも事実である。

そして今もめまぐるしく動いているユラの脳内は「まだあるな」と警告アラームを鳴り響かせている。

きっとこの話はここで終わらないのだ。

そうでなければ、本来ユラが狭間の空間ココにいることも、どうにもファンタジーな面々からこんなけつたいな話を聞くこともないはず。

つまり、予測はしたくないようなことがあるから、わたしはココにいるのだ。

それを話し終えてないからの、彼らが目の前にいるのだ。

聞きたくないけど、聞かなくてはいけない……きっと最悪な事態。

盛大な溜息に、目の前の面々がビクリと肩を震わせる。(今からそんなでどうするのよ)

「さあ、次、話してもらいましょうか？」

「ひっ……」

につこりとほほ笑んで口を開けば、顔面蒼白のキレイどころさんたち。

あらあら、貴方たち、わたしの部下たちとおんなじよーな顔するのねえ。

え？　どんな顔って？

そりゃあ、とんでもないトラブルを抱えてしまって、それを報告・相談しにくる時の顔に決まってるじゃないのー。大事よね、報告・連絡・相談。社会人の基本よ、キ・ホ・ン。

言っておきますけど・・・。

わたし、本来とーっっても温和な性格なんですけどね。

お願いだから怒鳴らせないでちょうだいよ？

## いつも通りの日常と過去と #04 (後書き)

界渡り管理局にて、すでに椅子に座って上座状態のヒロインちゃんです。

狭間の空間、ファンタジーな方々という現実を認識した瞬間から無自覚でイメージで物を創れる世界と察知。

当然、その姿を見た界渡り管理局員の一部は「やっぱりタダモノじゃない」と思っていたり(笑)。

いつも通りの日常と過去と #05 (前書き)

前半の日常話はちょっとほのぼの。

後半の過去話は、コメディ4・5：シリアス5・5

「うわあ、ほんとおばちゃんのオムレツ、最高だな。俺、毎週月曜が楽しみなんだ！」

料理を作る人間にとって、子供の素直な称賛ほど嬉しいものはない。

心の中では（あら、先週はクロワッサンを食べて似たようなこと言ってたわよ〜）と意地の悪いツッコミもするが、それでも嬉しいものは嬉しい。

「ありがとね。ジャンが毎週早起きして新鮮な野菜を持ってきてくれるから、わたしも嬉しくて頑張っちゃうの」

「へへ、だつてほんとに美味いんだもん。おばちゃんのごはん。ああ、母ちゃんもおばちゃんくらい料理上手ならなあ」

「何言ってるの、マリーナさんだつて美味しい煮物を作るじゃない。前に頂いたカポーチアの煮物、美味しくて、おばちゃん作り方教わったくらいよ？」

ジャンの家は、父親のポメロと母親のマリーナ、祖母のサンディア、まだ6歳の妹シルエラと2歳の弟アルズの6人家族だ。

以前、薬を持って立ち寄った折、マリーナから「先生も一緒に」というお誘いにちゃっかりのつて、楽しい夕食の場でいただいたカポチアの煮物は甘辛く煮付けてあって、かなり美味しかったのを思い出す。ほかにも兔肉のグリルや、畑で獲れた野菜を炒めた物など、どれも十分にユラの舌を満足させる物だった。

ユラが首を傾げると、ジャンが困ったように笑って「そうじゃないんだよ」と言う。

「や、母ちゃんのメシ、確かに夜は美味しいんだけどさあ・・・朝がひどいんだよなあ。今朝なんてシルエラが熱出してたからパンすら切ってなくて・・・」

「あらあら大変。後で背負子を返しにいくついでに、熱さましの薬持っていてあげないと・・・」

「それはありがたいけどさあ。でも、母ちゃんの朝飯は手抜き具合がひどいんだよ」

「なるほどねえ。でもそれは仕方ないわよ。毎日々々、朝早くから畑で仕事があるんだから」

農家の朝は早い。

朝、日が昇る前には起きて畑に向かい、植付け、畑作り、種蒔き、草むしりといった作業をする。合間に朝食を食べ、また畑に戻って、出荷するための野菜の収穫や肥料作りなどで夕方まで忙しく働く。

これがユラが知っている世界であれば、人手の代わりに機械があり、専門の会社が作った肥料や強い除草剤と便利な道具があるが、この世界は違う。全てが人の手でまかなわれているのだ。

朝早いのも、暗くなっても電気の灯りといった便利なものが無いからだ。

（エコっていうか、まあ日本も大昔はそれが当たり前だったって話だけだね）

そんなわけで、ジャンの両親であるポメロもマリーナも、ジャン

よりも小さい妹弟の世話を祖母に任せて、毎朝親子三人で畑仕事に精を出しているのだ。

母親のマリーナにいたっては、畑仕事の合間に洗濯やら掃除やらといった家事が追加されるのだからそれは大変なはずだ。

ジャンも母親の大変さは分かっているのか「分かっているよう、俺だって、毎日朝早くから叩き起こされて手伝ってるんだからな」とパンにかぶりつきながら言葉を返すが、少々ご機嫌斜めなようだ。

自宅での朝食のひどさも不機嫌の理由の一つだろうが、それよりも幼い妹にかかりつきりになって自分がほったらかしにされたような気になったのが最大の理由ではないだろうか。

(やれやれ、どんなに仕草は大人ぶっても、まだまだ甘えたさんね)

「知ってるわ。ジャンが毎朝、畑仕事を手伝っているから、マリーナさんもポメロさんも助かってるって言ったもの。お父さんとお母さんを手伝うジャンは優しくていい子ね。うちにもこうやって学校に行く前にお野菜を持ってきてくれるから助かるわ。ありがとう」

そう言うと、ユラの言葉に何か感じるところがあったのか、半分ほどになったパンを両手にジャンが口を尖らせる。

「ちえー、おばちゃんずりいな」

「あら、何が？」

「だからさー、おばちゃんはそうやってすぐに俺みたいながきにありがとつって言うだろー」

「だって本当に感謝しているんだもの。ジャンにはありがとうはいくつ言っても足りないわ」

「はー・・・だからなんだよなあ・・・。なあ、母ちゃんに俺にありがとうって言えつつたのおばちゃんだろ。最近、父ちゃんも母ちゃんも朝手伝ったら、俺にありがとうなんて言うんだぜ？ 親にんなこと言われたら早起きして手伝わないわけにいかねえじゃんか」

ありがとうという言葉に誤魔化されているような気がしているのか、そう言いながらもジャンの口は尖ったままだ。でも両親や大人に感謝されるのは悪い気分ではないらしい。ふてくされた様子も照れ隠しなのだ。

そんな子供にもう一度笑って「まあそう言わないの、昨日お菓子を焼いたから学校に持って行ってお友達と食べなさい」と言えば、現金なもので尖った口はすぐに白い歯を見せた。

チーズを乗せたパンにかぶりつき、スープにサラダ、オムレツとすごい勢いで口に運ぶ子供。

そしてそんな子供を前に、お手製のハーブティーを飲みながら、野菜と一緒に持ってきてもらった週報紙に手をつける。

いつも通りとなった平和な週明けに、幸せを感じながら、ユラは週報紙の記事に視線を走らせた。

何をもって罪というか。

人を憎まず罪を憎め、って誰の言葉だっけかな？

訳のわからない場所で、訳のわからない相手を前に、本音を言えばビビってる。すっごく不安だ。だって、ここはアウェイ。わたしの居場所は元の世界の元通りの状態。目の前の彼らがどんなに善良な存在であれ、わたしがどんなに被害者であろうとも、ここにいる時点でフェアではないのだ。

もしかしたら・・・なんて希望的観測は、この状況では少ないとも多いとも言えない人生経験からもあり得ないだけは解っている。いつだって希望を持ちたいとは思いつけど、それだけを持って生きていけるほど、わたしは強くない。

これから明らかになる現実には、わたしにとってきつと重くて辛いもののような気がする。

聞いてしまったらプライドも何もかもかなぐり捨てて、みつともなく泣き喚くかもしれない。怒声を張りあげて目の前の面々を詰るかもしれない。無茶をたくさん言うかもしれない。

おそらく、彼らもそれを予測している部分もあるのだ。

だからわたしは、虚勢を張ってでも、真実を知るその瞬間まで自分らしくありたいのだ。

そして、わたしの目の前には、これまでの担当者A〜Dとはちよ

っと違うキラキラしいのがある。

この場には10名ちよつとのファンタジーな存在がいるが、その中でも、どうもキラキラ加減だけではなく、そのおどおどした態度からして今までの担当とはちよつと違う気がした。

「ここが夢の世界じゃないって自覚してから、それまで薄ぼんやりとしていた印象が随分はつきりと映るようになって、その表情も判るようになったのよね。（そして明確になったら、完璧な造作を持つヤツばっかで、違う意味でイラっときた）」

何て言うの？ その表情も怯えているっばければ、キラキラ度も薄い、って言うか・・・なんかついさっき「自分らしくありたい」なんてシリアスぶったわたしがバカをみそうな相手って言うの？ 非常にいやーな予感がするのよね。思わず眉間を寄せたら、それだけでビクリと体を震わせるキラキラくん。心なしか涙目？

いわゆる小心者（善良は善良なんだろうけど）って感じ？

でもってヤツが口を開いてから30秒。

「えっ、と、ですねえ・・・」

「・・・」

「その、あのう、んっ、えっ、と・・・今回の事象で、ございませうが、あのっ、そのっ、こ、これは間違いなく、か、界渡りに関する、えとっ、あ、貴女様が仰るところのっ、か、界渡り管理局のわ、我ら担当にとつても、ぜ、前代未聞の、えつと、じ、事象で、あつて、そのっ・・・さ、さらには、な、何らかの手違いで、・・・つと、貴女、様が・・・異世界に介入することとなった、げ、現象は、その、えとっ、現在もちよ、調査中でありま、」

「ストーーーーーッップ!!!」  
「っ、ひいいいいっ!」

椅子から身を乗り出し、掌をヤツの眼前に突きつけて言葉を遮った。

当然、情けない声を挙げて転んで尻もちをついたヤツの周りではさらに恐縮したキラキラしいファンタジーな面々が頭を下げたのは言うまでもない。

思った通り、アタリ・・・わたしってばバカを見たわけよ。

何の担当だかは知らないけれど、担当EでもFでもなく「小心者局員その1」と決定。

つまり、真実を知る前にわたしをブチ切れさせた超お馬鹿さん、  
ってことよね。

まさかこの場面になって、コレに当たるなんて、わたしってばど  
んだけ運が悪いのよ。

つつい「うふふ」って今まで一番低い声が出て、髪が逆立つ  
ても・・・仕方ないわよね？

「うふふ。あのね、キミがね、どんな立場なのかはわからないんだ  
けどね。わたし、そういうおためごかしな前置き要らないの・・・  
って言うか、あんた!」

「は、はいっ!」

「さっきの言葉の続き!! 『その原因解明に鋭意努力を払い』と  
かなんとか言うつもりだったでしょっ!!」

「へっ、あ、・・・す、凄いですっ。そうですっ！ その通りですっ！！」

泣きそうになっていたのが、わたしの指摘に妙に興奮する小心者社員その1。

お前はワンコ属性かっ！？ いるのか？ こんなシリアスとも言える空間でっ！？

「あらそう？ あのね、キミ？」と、幾分柔らかな声をかけると「は、はいっ！」と嬉しそうに返事する小心者社員その1、もといワンコ社員に変更！ そう思ったらほんとに耳と尻尾が見える。いらんわっ！

「あんたアホかあっ！！ こんな場面で必要なのは謝罪じゃなくて、これからの状況説明に対応策！ あんたどもり過ぎ！ 緊張し過ぎ！ ついでにさっきの言葉に訂正入れるとしたら、何らかの手違いじゃなくて、明らか手違いでしょうがっ！！ あんたがわたしに言ったのは謝罪じゃなくて、地球で言うところの遠まわしな責任回避発言！」

「ひっ、ご、ごめんなさいいっ！！」

「そこで謝って済ませるなっ！ 反省して弱点直して次に活かせ！」

御使いに対して、ヤツらとか面々とか彼とかあんたとかキミとか・・・随分失礼だとは承知しているのよ？ わたしだって。

が、ワンコ社員はじめファンタジーな面々のわたしに対する態度から、どうにもこうにも・・・会社にいるような気分しかないのよ、ココ。

そんなことをしている場合じゃないのもわかってるんだけどねえ。

何なのかしら、これ。

そして、さすがはワンコ属性。

こういったワンコ局員みたいなタイプは、大体において・・・。

「はっ、はいっ！ 気をつけます！ ご指導ありがとうございます

！ 魔操士様っ！！」

「よろしい、じゃあ・・・ん？」

そう。この場面ではまだ必要のない答え・・・爆弾発言・・・をかましてくれやがるのだ。

それは商談ならば、結果を左右するとしておきの切り札だったり、超NGワードだったり・・・。

さて、この場合は ？

「あんだ・・・今、何だった？」

「・・・へ？ ボク、何か？」

言った本人が自覚ない、って・・・どこまで新人ワンコ属性なのよ、あんだ。

あんだ以外の周囲のファンタジーな面々は、気付いたわよ。分かりやすく肩を竦ませた者も、無関心を装ってる者もいるけど・・・空気が変わったのは確か。

「こうまでお約束な展開だと、もしやトリックか？ とすら思うほど。」

にっこりほほ笑んで、ゆっくりと唇を動かした。

「わたしのこと、まそつしさま、とか言わなかった？」

その言葉に、目の前のワンコが息を呑む。

なんだったっていい。

辛かろうとムカつこうとなんだろうと・・・わたしは真実が知りたいのだ。

「知ってることも、本当のことも、これからのことも 全部、話してちょうだいね」

もう不安も後悔も恐怖も・・・後回しは結構だ。

## いつも通りの日常と過去と #05 (後書き)

ヒロインちゃん、内心「おらおら、とつと吐きやがれ」です。

最後の「不安も後悔も恐怖も」は、ヒロインちゃんの本音でもあり、界渡り管理局面々の本音でもあります。

ヒロインちゃんの場合は、告げられること、真実への不安・こんな状況になったことへの後悔・未来への恐怖。

界渡り管理局面々の場合は、告げることで傷つけるであろう彼女への不安・すべてへの後悔・これから受けるであろうヒロインちゃんからの蔑みや罵りへの恐怖。

どちらも受ける覚悟はあるけれど、怖いものは怖い。

それは「ひと」であっても、そうでなくても。

(どうでもいいはなし)

話の中であつたトリックですが、計略・策略という意味で使用。迷わせて誘導する策略という意味ではトリックが一番妥当だったので。つていうか、あとがきかいてる時点で、日本語でもよかつたんじゃ・  
・・とか今さら気付いたおバカなわたし・・・orz。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4128z/>

---

魔操士は平凡を愛す

2011年12月18日00時50分発行